「教育実習を振り返って」

[公立高等学校　数学]

はじめに

教育実習が終わりひと段落ついた今、自身の教育実習を振り返って見ると、元来の自身の理想の教師像とはまた別の価値観が生まれたと感じています。また、在校生だった頃には感じることのできなかった母校の教育現場としての側面を見ることができ、大変良い経験になったと思います。

職員室には日々生徒たちと真剣に向き合っている先生たちの姿があり、かつては親のように温かく接してくださっていた先生方も、教師として偉大で、人生の先輩としても素晴らしい先生であると気付きました。そんな方々と共に数週間過ごす中で、“自身は生徒にどんな価値を残せるだろうか”と常に考えながら教育と向き合い続けてきた数週間でした。

このような環境を用意してくださった先生や学校関係者の方々には感謝の気持ちがやみません。また、そう遠くない時期に教育現場に戻り、何か価値を残せる人間になりたいと考えています。

1. 実習の心得

実習が始まるにあたって、まずはオリエンテーションと人権についての教育、教育実習生としての心構えについての説明がありました。ここでは教師として当然の言葉遣いや考え方、生徒との接し方について学びました。特に生徒との接し方については、最近の世論の動きもあるため注意するようにとのご指導がありました。

さらに、校長先生から「実習生としてきているけども気にせず、教師としてどんどんチャレンジしていってほしい」とのお言葉をいただきました。確かに自分たちは実習生としてきてはいるものの、生徒時代を思い返せば実習生も関係なく一人の先生として見えていた記憶があります。そこで、実習生だから…という考えは持たず、教師として、母校の先輩として、生徒たちに何を残せるのかを深く考えながら実習に挑もうと決心し、実習に取り組むことにしました。

2. クラスの担任として

私の母校は、普通科で入学したのち、2 年次より文系コース、体育専門コース、理数専門コースの３つに分かれます。さらに 3 年次になると選択科目も増え、より個人の夢や目標に向かって進路を後押しする環境が整っている学校であると思います。しかし、そんな時代の多様化に合った環境ができている反面、学力やモチベーションの格差がこの学校の課題点でした。この点に関しては多くの先生が口を揃えて、「なんとか言ってやって…」と非常に悩んでいる様子でした。確かに、地域の中堅高校ということもあり、多様な生徒がいた記憶があり、進路指導や授業作りの面からすればとても難しい学校であると思います。

そんな中、私が担当することになったのは 3 年生の理系専門コースと文系コースが混在するクラスでした。クラスに入りまず感じたのは、賑やかな学生が多い母校の割には、とても落ち着いているという印象でした。しかし、進路に対しては他クラスに比べて意識が高く、先輩として何が残せるのかという面で一番頭を使ったところであります。実際に受験を乗り越えてきた身として、ロングホームルームの時間

を使い、話をしてほしいとクラス担任から依頼されたため、進路について、受験について生徒たちの前で話すこととなりました。

そこで話した内容は、主に①「今の学力で進路を決めるな」と②「敵を知ること」の二つです。具体的に①「今の学力で進路を決めるな」は、現在の模試の結果や定期テストの結果で、志望校をなんとなく決めている人が多いと感じたからです。確かに現時点での学力はスタートラインという面では重要だと思いますが、今は何ができていないのかを知ることが大事だと思います。故に、現時点の結果で一喜一憂するのではなく、本当の目標に向かって頑張ってほしいと実体験や模試の結果の見方の説明を交えながら話しました。②「敵を知ること」については受験勉強の仕方についてです。いざ大学やその受験を目標に設定したところで、どのような問題で、何が足りないのかが分からなければどうしようもありません。要するに、自分に何が足りていないのかを把握し、試験日までにどのように対策していくのか、簡単な図を用いて説明しました。

その結果、生徒たちは熱心に耳を傾け、授業後や放課後に個別に相談に来るようになりました。そこでは、歳の近い私にだからこそできるリアルな悩みをぶつけてくれ、とても嬉しく思いました。これからも、彼らの進路については気にかけたいと思っています。また、進路指導には形だけではなく、気持ちを持って生徒と接していくことが大切だと強く感じました。

3. 授業見学

担当教科だけでなく様々な教科の先生の授業を見学させていただく中で、発見や学ぶことが多くありました。まず、どの先生も共通で授業の目的、目標がはっきりしており、生徒に合わせて分かりやすく授業を進めていました。また、同じ内容の授業でもクラスによって進め方を変えたり、興味の惹き方が違い、必要があれば授業とは直接関係のない話題にも柔軟に対応していた姿が印象的でした。そして、今までは同じ授業を複数回見るといったことはなかったので気付きませんでしたが、生徒の反応は時間やクラスの雰囲気など様々な環境によって変化していく、まさに「授業は生き物」とはこのことなのだと思いました。他にも、扱う教科や科目によっては授業の形式を変えたり、板書を工夫したりと“教えること”の合理的自由度の高さを学びました。

4. 授業

実際に私が担当することになった授業は、3 年の理系を対象とした数学Ⅲと、文系の数学を総復習する演習授業で、いくつかのクラスを掛け持ちすることになりました。ここで重要な問題となっていたのが前述の「2.クラスの担任として」の通り、様々な生徒がいるということでした。つまり、生徒感を一概に統一できず、どのような難易度で、どのようなペースで、授業を進行していくのかが予測しづらい問題があると感じたのです。特に数学に関して言えば、それがより顕著に現れる教科だと思います。

そこで、数学科の先生に相談したところ、「指導案は参考程度にしかならない。知識をつけ授業のバリエーションを増やすことと柔軟さが大事。」とアドバイスをいただきました。これは実際に授業をしてみてもとても感じたことで、結局は知識がある状態でその環境を察知し、授業の 50 分が終了した時に生徒に何が残っているか、これに尽きると思います。

しかし、実際に授業を持つようになった時、クラスに一定数いる数学の苦手な生徒や、理解せず暗記で

こなす生徒に対し、どのようにして数学的な考え方を理解させるかという壁に当たりました。もともと数学が苦手だった私にとって、どのような気持ちで生徒たちが数学に取り組んでいるのか大体の予想はつきました。そこから数学を武器にして受験に挑むにまで数学力を伸ばした経験より、実用的かつ理解できる数学をしようと思って授業を行うようにしました。

そこで、そのクラスの生徒がどこで躓き何が理解できないのか分析し、さらに限られた 50 分の中でどんな目標に向かい、何を伝えるべきなのかを考えました。また、授業には関数を動かすことができるアプリなど情報技術を取り入れ、視覚的にも理解しやすい授業に工夫しました。

イメージと計算の両方から数学を理解することができるように心掛けた結果、生徒だけでなく先生にもためになったといってもらえるような授業が完成したと思います。ここに関していえば、自身のとても良かった点であり、自信にもつながりました。実際に教師として教壇に戻ってくる日にも、このように生徒に寄り添い、数学の本質を考える授業を目指して取り組んでいきたいと思います。

5. 母校の先輩として

母校の先輩として、高校や生徒たちに何が残せたでしょうか。毎朝、挨拶運動で正門前に立ち、空き時間があれば積極的にクラスを回ることを心掛けました。その結果、ある程度生徒からは顔を覚えてもらい、落ち着いた雰囲気だったクラスも打ち解ければ、高校の先輩として明るく親しみを持って接してくれるようになりました。また、同じくこの高校に通い、進路を決めた先輩としてたくさんの相談を受けるようになりました。

正直、教師として何か残せたかと言われると、短期間であったこともあり、不十分であったと感じています。しかしながら、母校の先輩としてリアルな相談や特別な距離感で生徒と向き合えたことは、他の先生には出すのが難しい価値を残せたと言っても良いのではないかと考えています。母校にお邪魔させていただくだけの実習生とならず、少なからず何か生徒たちに価値の残せた結果は、先生方に示すことができた自身の成長と、母校への恩返しになったのではないかと思います。

6. まとめ

実習生として過ごしたこの数週間はとても短く感じました。その中でも、はじめに校長先生がおっしゃっていた“チャレンジ”というものはある程度できたのかなと思います。また、授業に対しても、生徒に対しても、真剣に取り組めていたと総括し、実習生として訪れた今回は成功であったと個人的には思っています。

しかし、職業として務めるならば、教師の業務はこれだけではありません。実際にクラスの生徒対応や生徒指導、学年会議、行事、部活の顧問など挙げればきりがないほど仕事があり、先生方は常に忙しく動き回っていました。また、朝から学年ごとにミーティングを行い、先生間でも密にコミュニケーションをとりながら日々生徒と真剣に向き合い、お仕事をされていました。

実習生としては良かったとしても、教師として本当に大切なのはそういった姿で、次に教師として高校に通う日が来れば、今回の実習で見たり学んだことを自身で実行していかなければなりません。今回の実習に関わっていただいた方々に心から感謝するとともに、この経験を活かし、近い将来、教育現場に何か還元できればと思います。